

## 萩にあしあと残そよ

「移住して三か月半となつた」



念願の光景。夏みかんの実と花の競演！（5／11）

「パーティーに食材の買い出しに行くのも習慣となりました。

プライベートな時間は、趣味のケーナを吹いたり、海や川沿いをランニングしたり、市内外の様々な場所へ出かけたりしています。まだ知人も少なく、一人で過ごすことが多いのですが…。

令和元年(2019)  
8月1日発行  
一不定期発行一

今年四月十八日に市役所に転入届を出して萩市民となつた私。八月を迎えて、萩暮らしある三か月半となりました。ようやくといえればようやく、早くもといえれば確かに…、まあ事故ケガ病気もなく、まずはここまで順調といえます。

炊事洗濯、掃除にごみ出しと、これまで当たり前のように家族にしてもらっていたことを、すべて自身がすることへの不安は、予想を反してすんなりと解消。数日おきにス

### 〔日々の暮らし〕

◆町内会行事に飛び入り◆  
五月五日に近所の神社の祭礼がありました。見学だけのつもりで行ったのですが、「弁

〔あしあとノート〕  
萩に越してきた際、隣接する美祢市に住む二十年來の友人が、「うちやん、コメは買わんでええよ。」と、自身の水田で収穫した米をプレゼントしてくれました。五月下旬、田植えをするというので、わずかながら手伝いをし、結局焼き肉をご馳走になつて帰つてきました…。

◆自転車を購入◆  
車があるのであえて自転車を買うこともないのでしょうかが、市街地散策には小回りのきく自転車が一番です。軽い運動にもなるし、探検もできるし、駐車料金もからないので便利。仕事のリズムが掴めたら、通勤に利用しても良いなと思っています。

### 〔自由気ままな歌日記〕

人影の遠ざかりたる歌の碑に  
我れ寄り添へる

木漏れ日のもと

（五月一二日、鴨山記念館）

風にのり風に逆らふ海鳥の  
自在な様に見入りたるかも

（六月一五日、日曜の午後）

旅立ちの日より  
寂しさ勝るのは

郷の遠さを知りたればこそ  
(六月二三日、一時帰郷)



博多の百貨店で7日間の  
催事に出店しました。

### ◆斎藤茂吉鴨山記念館へ◆

塩原温泉にもゆかりの歌人斎藤茂吉の記念館が島根県湯抱温泉にあり訪ねました。茂吉が柿本人麻呂研究において、終焉の地と定めた場所です。訪れる人も少なく、存続が危ぶまれる状況と思いつつも、茂吉の気配を感じました。



後小畠町内会の一員です。  
(うしろおばた)



### 〔仕事はどうだい？〕

三ヶ月の試用期間を無事終了して、ひとまず正社員になりました。これまでとは、かなり違う内容の仕事をから、戸惑うことでもありますから、戸惑うことでもあります。どちら大違い！山口市や宇部市、遠くは下関市や岩国市まで出かけていきます。

七月からは基本的に単独で行動することになりましたので、道を覚えながら行動範囲を広げているところです。

チヨンマゲビールは、実は

二十年も作り続けているのに、県外はおろか県内にも知れ渡っています。

聞かれることも多いので、ま

ずは認知度を高めることが自

分の仕事なのかなと思うようになりました。

## 〔萩に關する自由研究〕

### 『萩の夏みかんについて』

「夏みかんと土壟」という景色を気に入つて、旅行に来れば必ずその景観を写真に収めてきました。それは萩に越してからも変わらず、折に触れて目を楽しませてもらっています。

今回は、萩博物館で開催の企画展「萩の夏みかん物語り」の展示から、その魅力に迫つていくことにしました。

まず、夏みかんの学名は、シトラス・ナツダイダイ・ハヤタ（Citrus Natsudaidai Hayata）といいます。これは、一九一九年に早田文蔵博士が新種として発表したことによる名称なのです。

ということは、日本原産種という扱いになるわけですが、このストーリーが面白いです。夏みかんの原樹は、山口県長門市大日比の西本家にあります。江戸時代中期の一八世紀に、近くの海岸に流れ着いた見たことのないミカンの種

子をまいて育てたものといわれています。それはアジアのどこかが原産ということになります。ですが、はつきりしなったのです。なんだか不思議ですね。

ちなみにこの夏みかん原樹は、昭和二年四月八日に国指定史跡及び天然記念物に指定されています。



の役人小幡高政が、生活に困っている士族救済のために「耐久社」という団体を設立し、夏みかんの苗木を大量に生産し栽培を推奨します。

彼は、もともと武家屋敷地にも植えられていて、あまり手をかけなくとも実る夏みかんを、主の居なくなつた広い武家屋敷地に植えて、大々的に栽培しようと試みたのでした。

う四〇年代（今から百々百十年前）には、当時の萩町の年間予算の八倍もの生産額を誇っていました。



萩の経済を支え、景観を形成してきた功績を知ると、「夏みかんといえば萩」というよりは「夏みかんあつての萩」と述べるべきかとも思えてきました。

### 〔お氣に入りの萩景色〕

萩の三角州が一望できる場所が田床山（たどじやま）です。箱庭みたいです。



明治時代の初期、萩藩の士族たちは生活に困窮していました。それは、江戸時代末の藩庁の山口移転に続き、明治維新・廃藩置県によって、萩は政治・経済の中心ではなくなつてしまい、藩の重臣たちはこの地を離れ、また萩に残つた士族たちは禄を失い日々の生活に困窮することになつたからなのです。

こうした状況を見かねて、明治九年（一八七六）、長州藩

栽培から十年程たつた頃にところが、夏みかん栽培は一九七〇年頃を境に衰退していきます。その頃までは、萩の夏みかんは鉄道を使つて遠くは北海道や東北まで全国各地へ出荷されていましたが、ミカンの仲間が出回るようになつて、次第に生産が減つていいくこととなつたのです。

しかし、夏みかん畑は、それまでの間、夏みかんが高値で取引され続けたことで、風から守るための土壟や長屋などとともに維持されてしましました。このため、武家屋敷地の区画も大きく変わることがなく、「江戸時代の地図が使える